原住民族をめぐるイメージ：
順益台湾原住民博物館学生ポスター作品を事例として

野林 厚志

國立民族學博物館・総合研究大学院大学文化科学研究科　教授

【要旨】

本報告では、国立民族学博物館（民博）が 2016 年 8 月に開催する企画展「（順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展）台湾原住民族をめぐるイメージ」」（「原住民族ポスター展」）の構成や展示資料を紹介しながら、現代の台湾社会における原住民族イメージの構築について考察を試みる。

民博では学術交流協定を締結している順益台湾原住民博物館において、2006 年より隔年で開催されている学生ポスターコンテストに出品された作品を展示し、台湾の若い世代がとらえる原住民族イメージを紹介する。筆者は高校生から大学生までが参加するこのポスターコンテストの作品がもつ躍動感、豊かな発想と原住民族文化の表象との間の関係に関心をもってきた。作品は原住民族、非原住民族、双方の学生が描いており、自己表象、他者表象の両方の側面を有している。こうしたエスニシティの可視化は、マイノリティである原住民族のイメージが社会的に認知、受容されることを促す一方で、当事者の思惑とは異なる先入観の形成や知的財産としてのモチーフの消費という状況も生じさせる可能性を有する。

これらの表象が生まれる背景には、作者がなにがしかの原住民族イメージを想起することが必要であり、その可能性にイメージを可視化させる物質文化、原住民族をめぐるメディアの影響等があると考えられる。本報告では、表象が生じる背景について考察するとともに、日常的には台湾の原住民族文化に接することの少ない日本において、原住民族イメージがどのようにとらえられているかについても若干の考察を行ってみたい。

キーワード：表象、エスニシティ、イメージ、異文化

原住民族巡禮印象：
以順益台灣原住民博物館學生海報作品為例

野林厚志

國立民族學博物館・總合研究大學院大學文化科學研究科　教授

【摘要】

本報告，是利用介紹國立民族學博物館（民博）在 2016 年 8 月主辦的企畫展「（順益台灣原住民博物館所收藏・學生創作海報展）台灣原住民族巡禮印象」」（「原住民族海報展」）之展示架構及展示資料，試著探討在現今台灣社會如何建構對原住民族之印象。

在民博展示的是與之締結學術交流協定的順益台灣原住民博物館從 2006 年起每兩年舉辦的學生海報競賽中脫穎而出的作品，介紹的是由台灣年輕世代所捕捉到的原住民族之印象。從高中生至大學生都一起參與的這個海報競賽作品具有躍動感與豐富的構思，筆者關注其所呈現的活力、構思以及原住民族文化之表象之三者之間的關係。作品是由原住民與非原住民雙方的學生所繪畫的，兼具著自己表象與他者表象的兩面。如此般 ethnicity 之可視化，促使少數民族（minority）之原住民族印象得以被社會認定並接受，另一方面也可能產生消費了因與當事者思維不同的主觀形成或智慧財產之圖紋等狀況。

在形成這些表象的背景下，作者必須在某個程度上喚起原住民族印象，並有可能受到使原住民印象可視化之物質文化、以及原住民族相關媒體報導等之影響。本報告當中，在探討於生成表象之背景之同時，對於日常中鮮少接觸台灣原住民文化之日本，關於其對原住民族抱持著何種印象也是想試著探討之處。

關鍵詞：表象、ethnicity、印象、異文化

（譯者：胡家齊）

１．目的

本発表の目的は、国立民族学博物館（以下民博）が２０１６年８月から開催している企画展「(順益台湾原住民博物館所蔵・学生創作ポスター展）台湾原住民族をめぐるイメージ」」（以下「原住民族ポスター展」）の構成や展示資料を紹介しながら、現代の台湾社会における原住民族イメージの構築について考察を試みることである。[1]

「原住民族ポスター展」では、民博が学術交流協定を締結している順益台湾原住民博物館において、２００６年より隔年で開催されている学生ポスターコンテストに出品された作品を展示し、台湾の若い世代がとらえる原住民族イメージを紹介している。ポスターの作者はおおむね高校生から大学生までであり、原住民族文化や歴史、社会的な課題が作品の主題となってきた。

ポスターは作者が原住民族であれ、非原住民族であれ、対象は原住民族であり、現代台湾における原住民族表象の一つであると言ってもよい。マイノリティである原住民族のイメージが社会的に認知、受容されることを促す一方で、当事者の思惑とは異なる先入観の形成や知的財産としてのモチーフの消費という状況を生じさせる可能性を有する。

これらの表象が生まれる背景には、作者がなにがしかの原住民族イメージを想起することが必要であり、その可能性にイメージを可視化させる物質文化、原住民族をめぐるメディアの影響等があると考えられる。

本発表では、表象が生じる背景について考察するとともに、日常的には台湾の原住民族文化に接することの少ない日本において、原住民族イメージがどのようにとらえられているかについても若干の考察を行ってみたい。

２．順益台湾原住民博物館と「原住民族ポスター展」

順益台湾原住民博物館（以下順益博物館）は、日本の自動車企業の台湾における現地代理店を中心とした企業グループがメセナ活動として 1994 年に設立した博物館である。展示場は地下１階から３階まであり、エントランスとなる１階部分には原住民族全体の紹介とミュージアムショップ、２階部分には「生活と器具」をテーマとして、各民族集団の家屋模型や土器、籐細工、狩猟用具や織機といった生活用具が中心に展示されている。３階は「服飾と文化」というテーマで、衣類やトンボ玉を中心とする装飾品が展示され、衣類製作の映像等がモニターで放映されている。地下１階は「信仰と生活」を主題にして、信

[1] 本稿を執筆するにあたり、コンクールと展示会の主催者である順益台湾原住民博物館は審査や計画に係る内部資料をご提供いただいた。林威城主任、洪譽瑄学芸員には記して感謝の意を表す。

仰や儀礼に関連した資料が展示されると同時に、原住民族の歴史を解説したパネルが設置されている。また、同階には特別展示室と講義室が設置されており、特別展や企画展の開催や講演会等が実施されている。

順益博物館は、展示、教育、研究、収蔵という四つの柱をもとにして、「大衆」と「学術」の相互的な結びつきを深めようとすることを開館当初から考え、企画展示会や「DIY 教室」とよばれるワークショップを重ねると同時に、原住民族の集落への研修や集落との共催展示会である「部落特展」の実施等、来館者と原住民族重視の姿勢を一貫して取り続けてきた。また、原住民族学生への奨学金の支給、研究機関や大学への研究費の寄付、原住民族関連出版物の発行などを行ってきた。

「原住民族ポスター展」は、２００６年から順益博物館が２年に１回の割合で開催している、「全国学生台湾原住民ポスターコンテスト（全國學生台灣原住民海報創作競賽）」に入選した作品を順益博物館の特別展や巡回展として展示するものである。２０１６年の３月から５月にかけては第６回目の「原住民族ポスター展」が開催された。

「原住民族ポスター展」のことのおこりは、１９９６年に開催された順益博物館の特別展「台湾原住民・台湾印象」にさかのぼることができる。順益博物館は台湾ポスター設計連合会と共催して、連合会が例年開催しているポスター展の主題を台湾原住民族として、博物館の特別展として開催した。その後、２００６年より、台湾ポスターデザイン協会（台湾ポスター設計連合会を継承した組織）と共催でポスターコンテストを実施してきた。入選作品は、「原住民族ポスター展」として順益博物館の特別展示会で紹介されるとともに、図録にも掲載されてきた。

１９９６年から約１０年間の期間が空いた理由については定かではないが、この間には台湾社会の中で、ポスター展に少なからず影響を与える動きがあったと言える。一つは台湾原住民族の社会的な位置づけの変化である。１９９４年に憲法の中に原住民という言葉が明記され、原住民族に関わる政策を推進する原住民族委員会が設立されたことは、原住民族の存在を台湾社会において確実に知らしめることにつながっていったと考えてよい。また、２０００年から２００８年までは民進党が政権をとり、原住民族自治の推進や土地返還などを内容に盛り込んだ「原住民族と台湾政府との新しいパートナーシップ」が示されるなど、原住民族の政治進出が進み、 張恵妹のデビューや原住民族テレビ曲の開局（２００５年）等、社会の中で原住民族の存在が可視化される機会が急激に増えていった。山胞から原住民族という言葉に代表されるように、原住民族の文化は、山地にある遅れたものというイメージから、台湾の源が求められるイメージに徐々に移行していくことになった。

こうした原住民族をとりまく社会的環境の変化に加えて、台湾がグローバル社会の中で進んでいく方向性もまたポスター展の開始に多少の影響を与えていたかもしれない。台湾は、２００２年に、「挑戦２００８国家発展重点計画（２００２−２００７）」を発表した。グローバル経済環境、デジタル社会の到来、増大する大陸中国の経済的影響のもとで、いかに台湾の競争力を強化していくかということに取り組む経済計画であり、民進党政権が進めようとする台湾本土化が強く意識されたものであった。政府は推進する１０の計画をかかげ、e 世代の育成、デジタルリテラシーと英語力をもった次世代の育成についてあげられたのが、「文化創意産業発展」、いわゆる文化的創造力を産業につなげるというものであった。

原住民族やその文化の社会における可視化の強化、デジタルコンテンツ生産の推奨、文化と産業の結合への志向性は、「原住民族ポスター展」の目的や性格に見事に合致していることが理解できる。こうした時流をうまく読み取ることができたのは、順益博物館が私立博物館であり、その母体が企業であるという社会の動きに敏感な環境にあったからであろうと筆者は考えている。

３．ポスター展の実施形態

ポスター展はその前提として、学生を対象としたポスターコンクールの実施がある。つまり、ポスター展に出品される作品はポスターコンクールに応募され、入選される必要があるということになる。ポスターコンクールはポスター展が開催される前年に行われる。実施の形態は例年少しずつ変更があるようで、ここでは最新の２０１５年のポスターコンクールを例にとって説明する。

２０１６年のポスター展の場合は、コンクールの準備会議が２０１５年４月に実施され、９月に公募、１１月末に応募作品の締切があり、１２月初旬の審査会を経て、入選作品が決定し、２０１６年３月２５日から５月２９日までの会期で、順益博物館における特別展が開催された。準備会議には、ポスターデザイン関係の民間企業関係者、大学教員、順益博物館の館員が参加し、その年のスケジュールや実施詳細が決められている。

２０１５年のコンクールの主題は、「山海的傳唱—感恩！祭典之美」とされた。タイトルには山と海という場所に関する文言が含まれ、祭礼の美という、より具体的な内容が含まれたことは注目に価する。コンクールの主題は、初回と第２回目は設定されず、第３回は、順益博物館と民博が共催した国際連携展示の主題である「百年来的凝視」が採用され、第４回は、「山海的伝説−台湾原住民神話伝説」、第５回は「山海的伝承−服飾之美」と、第６回へつながる並列した統一感のあるものと変化していった。

応募者の資格は、高等学校、高等職業学校、大学、専門学校、大学院等に在籍していることが条件となっており、年齢に制限は設けられていなかった。応募様式は A3 サイズの実物を提出することになっており、入選した場合には、A1 で出力可能な電子ファイルでの作品の再提出が必要とされている。応募にあたっては、順益博物館の二次利用を承認することも求められている。

コンクールの主催は順益博物館と台湾ポスターデザイン協会で、指導単位が原住民族委員会、作品の出力等の関係でヒュレッドパッカード社から協賛を得ており、協力には台北市政府原住民族事務委員会が名前を連ねている。展示会には指導単位に文化部が加わっている。審査は、ポスターデザイン協会、大学のデザイン系の学部の教員等で構成される審査委員会で行われる。この際に、作者名や所属は伏せられることから、原住民族、非原住民族の違いを審査員は意識することなく選考が行われることになる。

また、第６回目は、応募作品は約１０００点で、参加した学校は３６校であった。この中から９９件の作品が入選し、展示会で紹介されることになった。これだけの応募数があったということは、大学を中心とした学界側も組織的にこのポスターコンクールとポスター展に取り組んでいると考えてよく、官、民、産、学の連携が実質的に果たされている展示会といっても過言ではない。

ポスター展は順益博物館での特別展示会終了後、台湾各地を巡回している。第１回目から第４回目までは地方の博物館や資料館で２３箇所、大学関係が２０箇所、海外での開催が２箇所で、計４５回の巡回展が実現している。例えば、第３回のポスター展は、地方の博物館等については、台北縣烏來泰雅文物館、苗栗縣賽夏族民俗文物館、花蓮縣壽豐鄉原住民文物館、桃園縣原住民文化會館、屏東縣來義鄉原住民文化館、花蓮縣政府原住民文化會館、彰化縣原住民文物館、花蓮縣吉安鄉原住民文化館、大学では、銘傳大學商業設計系、國立高雄師範大學美術系、萬能科技大學、高雄海洋科技大學、海外はカリフォルニア大学のバークレー校東アジア研究所で開催されている。

これは、展示物がポスターとそのキャプション、解説パネルなので、運送に際して簡便であること、壁面がけの簡便な演じで行えるという展示会実施のうえでの実務上の利点にあわせて、全体の主題が一つであることから、会場の大きさにあわせた展示件数の調整も可能であるからだろう。いずにしても、これだけの巡回展示を実施できる事例は非常に少なく、展示会の効率という点においては高く評価できるものと言える。

４．民博での「原住民族ポスター展」

民博においてこのポスター展を開催するうえで、いくつかの課題があったが、特に次の４点は、展示会の基本設計を進めるうえで検討を特に要する事項であった。（１）対象となる展示作品が第１回から第６回まですべて含んでいるということ、（２）限られた面積の展示空間であり、照明等の条件が順益博物館と大きく異なること、（３）原住民族に関する知識、台湾に関する知識が、台湾と日本の来館者とでは大きく異なること、（４）台湾側からポスター以外の展示物の出品要請があったこと、である。

紙数の都合で、それぞれに対して設計立案の段階で行った詳細な検討内容は別稿に譲り、基本設計の骨子を概述すると、民博での展示会はおおむね三部構成とし、第一部はポスター作品を網羅的に展示し、色や形をイメージとして観覧者に印象づけ、第二部では館蔵資料、台湾からの借用資料を展示し、２次元のポスターと３次元の原住民族の工芸作品や標本資料を対照することにより、ポスターで表象されている事物を観覧者に具体的に想起させ、第三部は、第４回目以降の台湾側のポスター展においてとりあげられた主題である故事・神話、装い、祭礼、山海（自然）を中心に、個々の作品を作者の説明のテキストをあわせて展示し、イメージとテキストによる表現を対照させる、とした。また、入選したポスター作品全体のインデックスを作成し、デジタル環境で作品を基本情報とともに検索、鑑賞できる環境を整えることもあわせて構想した。[2]

展示全体に含まれる要素は、グラフィック、テキスト、デジタルイメージ、マテリアルの４つであり、おそらく現在の展示、展覧会で使用される主要なメディアがすべて含まれた複合的なかたちをとることになったと考えてよいであろう。

５．主題化される原住民族イメージ

筆者は結果的に第１回から第６回までの作品を見通す作業を行ったことから、作品の描かれ方に変化が生じている感覚を持つことになった。[3]それは、ポスターコンクールの主題が設定されることにより、ポスターに投影される原住民族イメージが焦点化していったことである。より具体的に述べるならば、個々のポスターは各回の設定された主題に引きつけられることにより、政治性や社会的主張といった要素が抑えられるようになっていったということである。

---

[2] 展示会場設置の経費については、順益博物館より奨学寄付金の形でご協力いただき、ポスターの閲覧システム導入については、国立情報学研究所の阿辺川武准教授の献身的なご助力を得た。

[3] 筆者は応募作品のすべてを観察しているのではないため、審査の段階で政治性の強いものが除外されるようになった可能性は否めない。

第１回と第２回では、原住民族がおかれている現状への異議申し立てや歴史的抑圧に対する抵抗が訴えられた作品が散見された。

例えば、第２回で優異奬を受賞した「融化？同化？」という作品は、溶けそうなソフトクリームがポスターの存在感を強く示している。ソフトクリームのかたちはよく見ると台湾のかたちをしており、クリームのいろいろな味の柄は原住民族の人たちが衣服に織りや刺繍でほどこす紋様に似ていることに気がつく。これが、原住民族の存在が強くしめされ、熱い議論が行われている台湾で溶けそうになってしまっていて、タイトルにもあるように、個性ある原住民族の諸文化が溶け合ってしまい、もとの味を失ってしまうのではないかというメッセージがこの作品からは伝わってくる。メディア等を通して社会の中に原住民族の文化化が登場する機会が増える一方で、それはかたちであり、本質的な部分では同じようなものになってしまっていくのではないか、もしくは相対的にはそれほど差異が留意されなくなるのではないかという不安がこのポスターには込められているようにさえ感じられる。

また、第１回の入選作品の「尋回自我」は、都市のなかで原住民族が自分の頭のなかに森をつくりあげ、そこを原住民族のいでたちをした人物が進んでいく様子が表現されている。原住民族の伝統領域が実証的に踏査されていくなかで、都市原住民族が回帰できるのは、観念的に作り上げた想像の森なのだろうかという問いかけをこの作品は示しているのかもしれない。同じく、第１回の入選作品である「老師我想説母語」では、民族語の使用を学校で禁止され、それを破るといわゆる方言札を罰としてかけられたことを主題とし、伝統言語に対する施政者側の抑圧に対する強烈な反論が示されている。

こうした政治的主張が全面に出された作品は第６回目の入選作品のなかにはほとんど見出すことはできない。これにはいくつかの要因が考えられるであろう。一つは、政治性を主張するようなデザインを志向する学生がいなくなったこと、つまり、政治的主張を行わない保守的な傾向が学生そのものに強まったということである。もう一つは、原住民族の文化や社会を表象するうえで、第１回や第２回のような主張をする必要が無くなった、つまり、社会的、政治的にも十分な対応が原住民族になされ、こうした政治的主張や異議申し立てがもはや必要なくなったということである。更なる可能性は、ポスターの主題が限定されることにより、創作する方向性が一定化していったということである。

もちろん、作品を網羅的に分析する必要はあるが、作品が変化していった主たる要因はポスターの主題が限定されていったことにあると筆者は考えている。　学生たちを中心としたひまわり革命や、選挙時の投票率の高さを見ても、台湾の学生の中にはまだまだ政治問題や社会の現状についての高い意識が潜在していると考えてよいであろう。また、原住民族自治や土地の所有問題等、

原住民族の社会的、政治的課題は解決したとはいえない現状であることは明らかである。

第６回の公募要領中には参考資料として、主題となる祭礼について民族別の候補が挙げられており、応募する学生はこれらの中から特定の祭礼を選択して作品の制作にあたったと考えられることから、制作の方向性がある程度絞られていったことは容易に理解できるであろう。さらに、公募要領中の参考資料としてあげられているのは原住民族委員会のホームページであり、創作の対象や関連する資料が絞られたかたちでの創作活動を行った学生は少なくないと考えられる。マスメディアなどでもよくとりあげられる、パイワン族の五年祭やタオ族の彫刻船の進水式はイメージとしてとりこまれやすいと言える。

こうした祭礼は、原住民族にとって継承されてきた文化的、歴史的営為であり、それ自体が政治性をもっているわけではない。正名運動やエスニシティの可視化に祭礼が利用されることはあっても、祭礼そのものが政治的に実施されているとはいえない。すなわち、祭礼は政治性を主張することには必ずしも馴染まない主題と考えられる。結果的には祭礼を通して学生が政治性や社会的課題を主張するような余地が無くなっていった可能性が考えられる。

６．結び

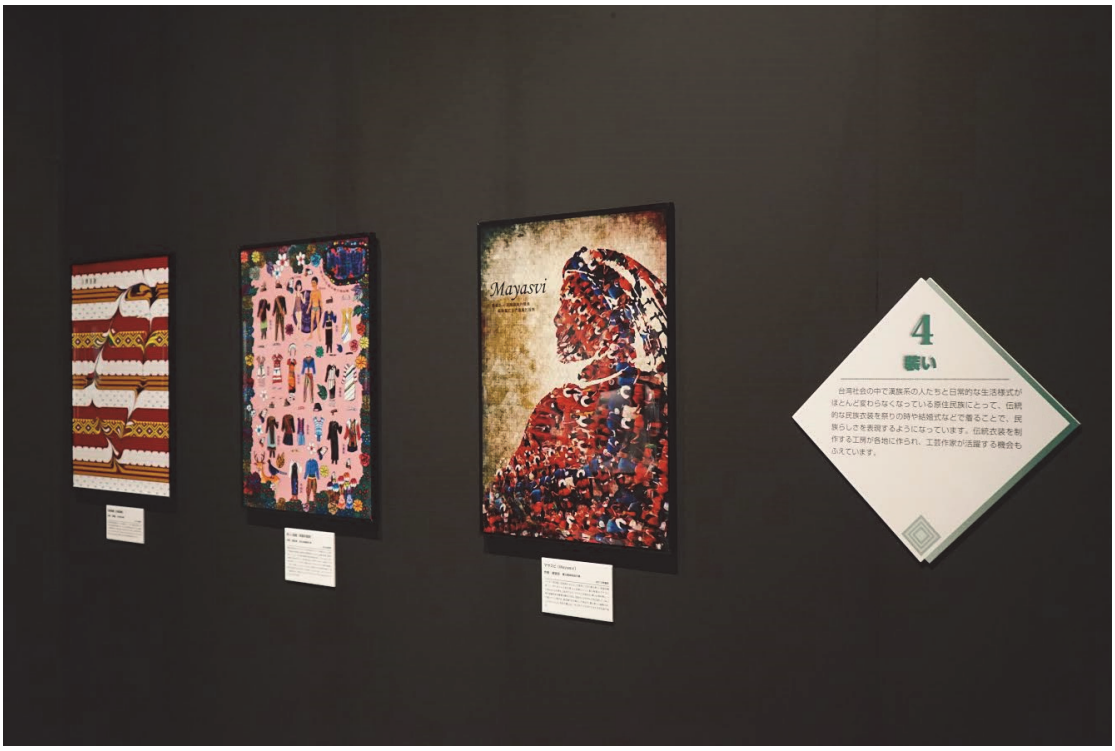
原住民族文化やエスニシティの表象は自己と他者の両方がそれにたずさわる点において、様々な思惑が交錯することは確かであろう。表象とは、誰が、誰に対して、いつ、どこで、どのように行うかという複数の変数が関わるからである。担い手が同じであっても時代や目的によって肯定的にも否定的にも表現されるかたちは変化していく。さらに、それを読み取る側の状況もその立場や時代によって大きく変わりうる。

順益博物館が継続してきたポスターコンクールに応募された作品もまた、応募の形式や時代的背景によってその表象のありかたを変えてきた。一つ言えることは、これらの作品が創作される背景には、原住民族文化を理解することを第一の目的とした順益博物館とそれに協力をしてきた原住民族委員会をはじめとする公的な機関、また、作品を展示というかたちで受け入れてきた地方の原住民族関連施設が存在しているということである。

一方的な原住民族イメージの形成はもはや社会的には通用しないであろう。同時に、イメージが作られていく際に必要となる情報を提供する側にも相応の責任が求められていくことは間違いないのである。

「２０１６年に順益台湾原住民博物館で開催されたポスター展の会場」

民博におけるポスター展の第一部。数多くのポスターで視覚に刺激を与える効果がねらいとなっている。



第３部では順益博物館での展示同様に、作者の解説をあわせて展示した。

参考文献

林威城
２０１２「全國學生台灣原住民海報創作競賽 」『原教界』１０月号、７２−７５頁、台北：国立政治大学原住民族研究中心

順益台湾原住民博物館
２００６『二〇〇六年全国学生台湾原住民海報創作競賽成果専刊』台北：順益台湾原住民博物館

２００８『二〇〇八第二屆全國學生台灣原住民海報創作競賽專刊』台北：順益台湾原住民博物館